



ア ト リ エ
訪 問

第 6 回

千住 博

日本画家

霧のような飛沫^{しぶき}を上げ、激しく流れ落ちる滝をキャンバスいっぱいに描いた「ウォーターフォール」。この作品で、一躍その名を世界に知らしめた千住博は、拠点をニューヨークへ移し、制作活動を続けている。今回は、発電所だった場所を改装したという、その巨大なアトリエに伺った。

撮影 常盤武彦

「ニューヨークなら、すべてのボーダーを超えて、自由に絵が描けると思いました。」

マンハッタンから北へ列車で約50分。木々に囲まれた閑静な駅の近くに「千住スタジオ」はある。外観はどっしりとしたレンガ造りで、まるで何かの工場のような。「SENJU STUDIO NY」と書かれたドアの脇にあるブザーを押すと、扉がガチャリと開き、真っ白な壁に囲まれた巨大な空間が目飛び込んできた。

—— 広くて、とても開放的なアトリエですね。

千住 以前はマンハッタンの中心部にアトリエを構えていたのですが、作品が巨大化して入りきらなくなってしまって。それで、ここに引っ越してきました。

この建物は昔、発電所として使われていたそうです。最初に訪れたときは、長い間使われていなくて、幽霊が出そうな不気味な空間でした（笑）。その巨大な廃屋をアトリエに改装しようと、建築家に何度も相談して、大工事を行いました。その



古い外観からは想像もつかないが、内部には明るく広々とした空間が広がっている。

かいあって、広くて明るい、理想的な空間ができたと思っています。

アトリエは、常にクリーンな状態にしておくように心がけています。頭の中が混沌としていますから、制作環境は整理しておきたい。また、毎日欠かさず、花を飾るようにしています。空間の中に生きたものがあるのは、すてきなことだと思うので。

普段は、朝6時にアトリエに入り、夜8時頃までずっといます。アトリエにすることが、画家の才能の一つだと、僕は思うんですよ。常にここにいれば、何かをひらめいたときに、すぐに形にできるでしょう。写真家がシャッターチャンスを見逃さないために、毎日カメラを持ち歩いているのと同じ。たとえ制作に行き詰まって苦しい状態でも、いつもアトリエにしているようにしています。

—— ニューヨークに来て20年になるそうですね。なぜ、制作の拠点を日本から移されたのですか。

千住 僕が学生だった頃はインターネットがなかったので、海外の情報を得たり、日本から海外へ情報を発信したりすることがとても難しかった。だから、自分が情報の発信地に出ていくしかないと思い、学生時代から何度もニューヨークを訪れていました。

ニューヨークは、さまざまな国籍、宗教、思想によって成立している多様性に満ちた街です。ここならすべてのボーダーを超えて、自由に絵を描くことができると思いました。そして30代のとき、家族を連れて移り住むことを決断したんです。迷いはなかった。ニューヨークに骨を埋めるぐらいの覚悟がないと、何も実らないと思いましたが。

—— 海外で日本画を制作されているのが、興味深いなと思いました。

千住 日本画だから日本で描かなければならないということはないと思うんです。日本画は、本来もっと自由なものですから。

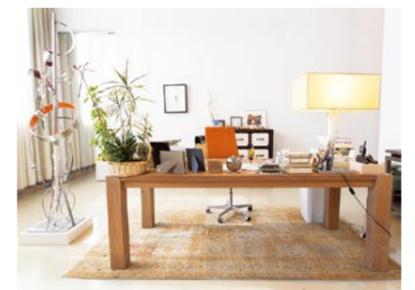


僕は滝を描くときに、エアブラシを使って岩絵の具を吹き付けるのですが、それを「日本画なのに邪道だ」と感じる人もいます。でも、歴史を見てみると、おがたこうりん尾形光琳やはせがわとうはく長谷川等伯らは、まったく常識にとらわれない発想で絵を描いている。日本画はもっと自由な発想で考えていくべきなんじゃないでしょうか。

そもそも芸術は、何ものからも自由でなければならない。そう考えると、多様性に満ちたニューヨークは、芸術家にとって最適の街といえるでしょう。僕は制作の場としてこの地を選び、これからもここで日本画を描き続けていくつもりです。



道具は整理整頓して収納。「どこに何があるのかがひと目でわかるように」を心がけている。



アトリエの一角にある書斎。制作以外の時間はここで過ごすことが多い。



せんじゅ・ひろし

1958年東京都生まれ。
87年東京藝術大学大学院博士課程修了。
95年第46回ヴェネツィア・ビエンナーレで東洋人として初めて絵画部門優秀賞を受賞。
2000年「両洋の眼・21世紀の絵画」展・河北倫明賞受賞。
02年第13回MOA美術館岡田茂吉賞絵画部門大賞受賞。
11年軽井沢千住博美術館を開館。
13年に大徳寺聚光院襖絵を完成。
近著に『日本画を描く悦び』、『芸術とは何か』など。